

中学校国語科における言語力の育成に向けて — 目的や意図に応じて読み、相手に伝える能力を高める言語活動の工夫 —

白井 真実

生徒の学力については、平成 22 年度全国学力・学習状況調査の「読むこと」や「書くこと」の問題に多くの誤答や無解答などの課題があった。また、本市立中学校に勤務する国語科教員へのアンケート調査によると、「話すこと・聞くこと」に関しては、「対話や討論」の言語活動が約 50%の実施割合であった。

こうした現状を受け、テキストを目的や意図に応じて読み取り、書くことで自分の考えをまとめ、それを的確に表現し伝え合っていく言語力の育成が必要であると考えた。その育成をめざすために、授業では、習得すべき力を認識することで主体的に学べる言語活動を設定し、研究を進めた。

第 1 章 いま、中学校国語科に必要な言語活動とは

第 1 節 諸調査の結果からの考察

OECD が実施した生徒の学習到達度調査 PISA2006 の結果について、文部科学省は、「読解のプロセスにおいては『テキストの解釈』『熟考・評価』に、出題形式においては『自由記述（論述）』に課題がある」と述べている。このことから、日本の生徒は、書かれている内容から更に考え、考えた内容を文章化することが苦手であるということが推測できる。

また、平成 22 年度全国学力・学習状況調査の結果からは、「文の構成を理解し、伝えたい内容を適切に書いたり、構成したりすること」や「資料や情報に基づいて自分の考えや感想を明確に記述すること」に課題があるということがわかった。

どちらの調査結果からも、これからの国語科の学習として「テキストから読み取り、そこから考え、深めた自分の意見をもつこと」「その考えを表現する様式・方法を身につけること」が必要であるということが読み取れる。

第 2 節 言語力育成のための言語活動の実際

本市立中学校国語科の授業において、以下のような言語活動に関する課題があった。

- 授業に生徒同士で交流する場面を取り入れる工夫をしている指導者は、4 割を切っている。
- 3 領域 1 事項の中でのつながりを考えた単元構想を重視した指導計画を立てている指導者は、2 割を切っている。
- 「話すこと・聞くこと」領域での「対話や討論を行うこと」、「書くこと」領域での「報告や意見発表などのために簡潔でわかりやすい文章や資料などを作成すること」、「読むこと」領域での「様々な文章を比較して読んだり、調べるために読んだりすること」の実施割合が約半数であった。

第 2 章 確かな学力を培う言語活動

第 1 節 見通しをもたせる単元構想

学習過程を明確にすることが、見通しをもつことや生徒の主体的な学びにつながり、学ぶ意欲を向上させるのではないかと考えた。そこで、図 1 のように、見通しをもたせる指導の在り方と学びの意欲の関係を考えて。指導者が「単元を通して身につけたい力」を設定し、生徒は学習課題を考える。学習課題を解決するために、言語活動を行

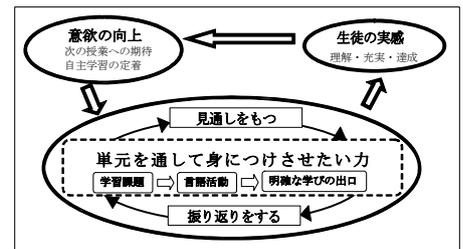


図 1 見通しをもたせる指導の在り方と学びの意欲の関係

を行い、学習の出口をめざす。生徒がより主体的に学ぶことによって、理解したという実感が湧き、意欲をもって学ぶ生徒の姿が期待される。

第 2 節 主体的な学びにつながる領域関連

「生徒が主体的に学ぶ姿」をめざして、手だてとなる 3 領域の言語活動を、以下のように考えた。

- 自分の考えを相手に伝える技術を学ぶための、対話や討論など生徒同士で交流する言語活動
- テキストから考えたことを伝えるため、自分の考えが明確に伝わる表現の仕方を学ぶ言語活動
- 文章を比較して読むことや、調べるために読むことを通して、「何のために読むのか」という目的を意識しながら読む言語活動

また、グループ学習をすることからは、「話し合うこと」と「学び合うこと」における効果が期待される。

本研究では、第 1 学年と第 2 学年において、これらの手だてを授業に取り入れ、実践を行った。

第3章 目的をもって伝え合う言語活動の実践例

第1節 第1学年の実践から

単元4〔古典との出会い〕教材『今に生きる言葉』では、故事成語の由来を紹介するために「故事成語カード」の作成を学びの出口とした。学習計画表で学習の見通しをもち、毎時間の学習内容を把握することから学習を始めた。学習内容を明らかにすることにより、生徒は、毎時間集中して学習し、紹介するために故事成語の由来を要約することができた。また、グループで話し合いながらカードを作成し、お互いの文章を読み合い、参考にしながら書き進めることができた。

また、単元5〔真実を語る〕では、説明的な文章から構成や展開を読み取り、レポート形式の文章に生かすという学習をした。学習計画表を作成し、単元の見通しをもち、グループ学習において話し合い、学び合いながら学習を進めることができた。このことにより、生徒は、説明的な文章の構成を読み取るという学習内容を、レポートを書くという目的に生かすことができた。また、グループ内での助言を基に推敲し、文章を適切に書き直すことができていた。

第2節 第2学年の実践から

単元2〔真実を探る〕教材『短歌を味わう』では、学びの出口に『人物紹介パンフレットを作ろう』という教材を設定し、学習を進めた。学習計画表には、「身につけたい力」を示し、生徒に、どの時間にどのような力を身につけることができるのかということがわかるようにした。短歌を鑑賞し、歌人について調べ、自分で短歌を詠むことで、歌人の心情に迫ることを、「読むこと」領域のねらいとした。このことにより、生徒たちは、作成した「人物紹介パンフレット」に、興味のある歌人の人生や代表作について詳しく示したり、自分の短歌や調べた感想を載せたりと、パンフレットの中身をより深いものにすることができた。

また、単元5〔事実と意見〕では、説明的な文章から、根拠の示し方を読み取り、説得力のある意見文を書くことに生かすという学習をした。

「読むこと」領域として、『モアイは語る』という教材から、筆者の主張とその根拠となる部分を探し、付箋紙を利用してどのように論述されているかを読み取るという学習をした。このことにより、生徒は、説得力のある意見文を書くために明確な根拠を述べる必要性を学ぶことができた。

「書くこと」領域の学習では、説得力のある意見文を書くために、根拠を本やインターネットから探し、その根拠を意見文の中に示すことができた。

第4章 研究の成果と課題

第1節 研究の成果について

指導者が単元構想の基に指導計画を立て、生徒が学習の見通しをもつことについて、アンケートから次のようなことがわかった。

- ・学習計画や学習課題を考えることで見通しをもって学ぶことができた…約80%
- ・「身につけたい力」を意識して学習することができた…約80%

また、生徒の感想としては、以下のようなものがあった。

- ・この一時間で絶対にこれができるようになるうと目標を立てることができた。
- ・次の課題にどのようにして取り組んだらよいかということを考えることができた。
- ・普段は言われたことをやっているだけだったけど、計画を立てることで、何をしてどんな力をつけたいかを意識できた。
- ・次にすることがちゃんとわかったし、計画を立てておいたら、以前に授業で学んだことも思い出せた。
- ・そのとき自分がやるべきことが明らかになっているから、順調に進めることができた。 など

生徒一人一人は、単元の見通しをもつことで、学習の流れや課題を把握し、学ぶ意欲をもって、主体的に学ぶ姿が見られた。

領域を関連させた学習については、「読むこと」で学んだ内容を「書くこと」に生かすことができ、学習の出口とした「故事成語カード」「レポート」「人物紹介パンフレット」「意見文」など、ねらいを明確にして書くことができていた。

第2節 今後の取組に向けて

今後、更に確かな言語力を育成するためには、指導者が「学びの系統性」を意識し、生徒にわかりやすく伝え、認識できるようにすることが必要であると考えた。それにより、「これから、どのようなことを学ぶ必要があるのか」「いま、学んでいることは、将来どのように生かすことができるのか」と考え、単元や学年といった枠にとどまらず、更に先まで見通して学習することができるようになる。このことが、生徒の確かな言語力を育成することにつながり、実社会においても、言語力を駆使して人とコミュニケーションができるようになることと期待できる。

また、小中連携教育が大切である。学習指導要領にも示されている通り、小学校で学んだことが中学校での学習の基礎となる。小学校での既習事項についての指導者の認識が、生徒の学力向上に与える影響は大きいと考える。